

長岡京市文化財調査報告書

第 59 冊

2011

長岡京市教育委員会

編 集 財團法人 長岡京市埋蔵文化財センター

長岡市文化財調査報告書

第59冊

2011

長岡市教育委員会

編集 財団法人 長岡市埋蔵文化財センター

序 文

全国的に古い地名が消滅していく中、長岡京市は、かつて幻であった「長岡京」が現の都「長岡京」となり、市名も 1200 年前の名前に戻すなど、創世への意欲が満ちあふれていた活気を現代に生かしたまちづくりに取り組んでいます。

さて、平成 22 年度は、長岡京市の文化財保護行政において画期的な年でありました。それは、長岡京跡でこれまで 2 千回に及ぶ発掘調査が実施され、都城「長岡京」が全国に広く認知されたことを顕彰して、中山修一先生が長岡京発見のきっかけとなった開田の地に「長岡京発見之地」の石碑が建立されたことです。同地は、長岡京発見のひらめきを生んだ由緒ある場所で、JR 長岡京駅前にあります。この地を訪れた市民や観光客の方々に石碑建立の趣旨を伝え、長岡京跡を知っていただける場所になることを願っているところです。

本報告書は、平成 22 年度に国庫補助事業として、長岡二丁目、井ノ内的田、下海印寺下内田の 3 つの地区において実施した発掘調査の成果をまとめたものです。これら 3 つの地区は、長岡京跡をはじめとし、井ノ内的田地区は、縄文時代晚期や弥生時代前期などの上里遺跡、下海印寺下内田地区は、縄文時代中・後期などの伊賀寺遺跡と重なっています。今回の発掘調査は、これらの遺跡がどこまで広がっているのかを確認するために実施したものです。この調査成果を遺跡保存や地域学習の資料として広く活用いただければと思います。

最後になりましたが、調査にあたり数々のご協力をいただきました土地所有者の方や近隣の皆様方、ご指導をいただいた諸先生方、調査を担当していただいた財団法人長岡京市埋蔵文化財センターなどの関係機関に深く感謝いたします。

平成 23 年 3 月

長岡京市教育委員会

教育長 芦田富男

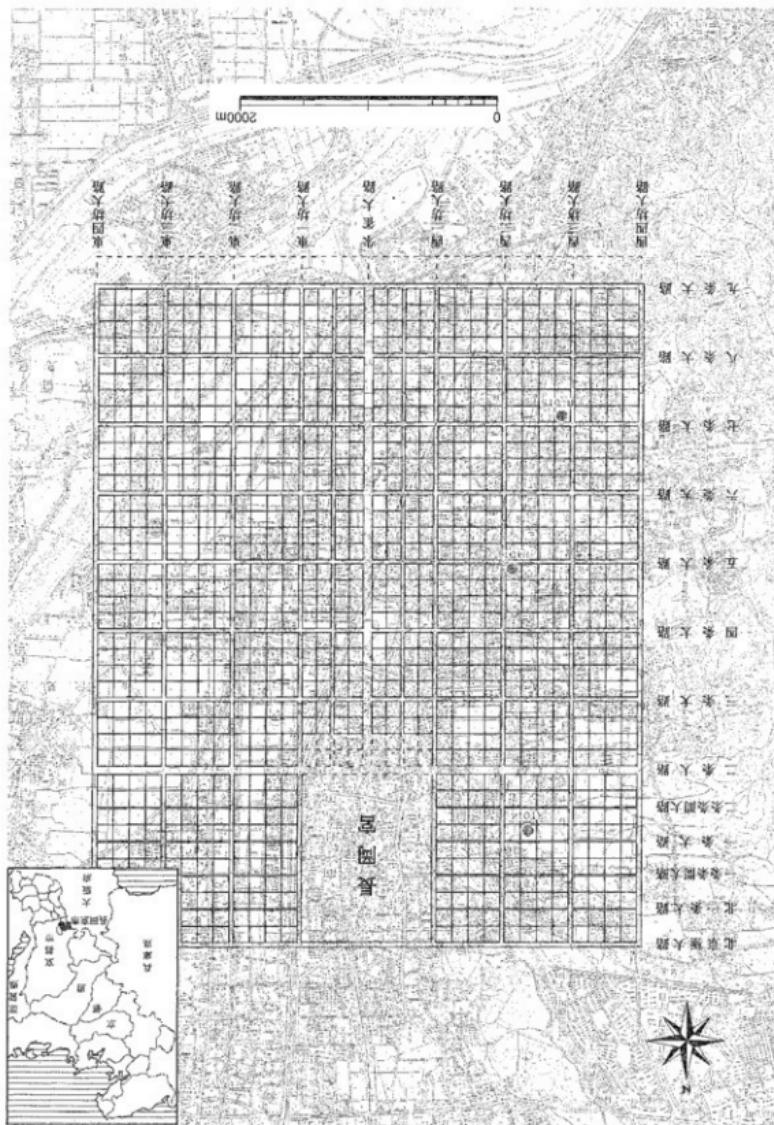
凡 例

1. 本書は、長岡市教育委員会が平成 22 年度に国庫補助事業として財団法人長岡市埋蔵文化財センターに事業を委託して実施した発掘調査の概要報告である。
2. 調査対象地は、第 1 図および付表-1 に示した。
3. 長岡京跡の調査次数は、右京域と左京域に分けて通算したものである。また、調査地区名は、前半が奈良文化財研究所の遺跡分類表示、後半が京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報』(1977 年) 収録の旧大字小字名による地区割りと同地区内における調査回数を示す。
4. 長岡京跡の条坊名称は、山中章「古代条坊制論」『考古学研究』第 38 卷第 4 号 (1992 年) の復原案に従った。
5. 本書で使用する地形区分は、特に断らない限り「長岡市域地形分類図」「長岡市史」資料編一 (1991 年) によった。
6. 本文の（注）に示した長岡京に関する報告書のうち、使用頻度の高いものについては、『長岡市埋蔵文化財調査報告書』第 2 集 (1985 年) に従って略記した。
7. 本書において使用している構造番号は、長岡京跡に関する調査の場合、調査次数+番号であるが、報告によっては煩雑さを避けるため調査次数を略している。「SD01」などの場合は、調査次数を冠した「SD ○○○ 01」が正式な番号である。
8. 本書で使用している方位と国土座標値は、旧座標系の第 VI 系によっている。
9. 本書挿図の土層名で＜＞を付けて示した記号は、『新版標準土色帳』(1997 年版) の J I S 表記法による土色である。
10. 本書各調査は執筆者を各章のはじめに記し、編集は財団法人長岡市埋蔵文化財センターの小田桐淳が行った。

付表-1 本書報告調査地一覧表

調査次数	地区名	所 在 地	現地調査期間	調査面積	備考
長岡京跡右京 第 1011 次	7ANKSN - 10	長岡市長岡二丁目 431 番の 一部	2010 年 10 月 5 日 2010 年 10 月 8 日	20 m ²	開田城ノ内遺跡
長岡京跡右京 第 1014 次	7ANGMD - 2	長岡市井ノ内町 6 番地	2010 年 11 月 29 日 2011 年 1 月 13 日	54 m ²	上里遺跡
長岡京跡右京 第 1016 次	7ANOOD - 11	長岡市下海印寺下内田 14-1 番地	2010 年 12 月 13 日 2011 年 1 月 25 日	112 m ²	伊賀寺遺跡

图 1 地圖上某地的位置 (1/40000)



本文 目 次

第1章 長岡京跡右京第1011次（7ANKSN-10地区）調査概要

1	はじめに	1
2	調査経過	2
3	検出遺構	2
4	まとめ	4

第2章 長岡京跡右京第1014次（7ANGMD-2）調査概要

1	はじめに	5
2	調査経過	6
3	検出遺構	10
4	出土遺物	14
5	まとめ	14

第3章 長岡京跡右京第1016次（7ANOOD-11）調査概要

1	はじめに	15
2	調査経過	16
3	検出遺構	17
4	出土遺物	19
5	まとめ	20

図 版 目 次

長岡京跡右京第 1011 次調査

図版1 (1) 調査地全景 (南から) (2) 調査地全景 (北西から)

長岡京跡右京第 1014 次調査

図版2 調査地全景 (南から)

図版3 (1) 調査地全景 (北から) (2) 調査地遠景 (北東から)

図版4 (1) 1 トレンチ上層 (西から) (2) 1 トレンチ全景 (西から)

図版5 (1) 2 トレンチ上層 (西から) (2) 2 トレンチ全景 (西から)

図版6 (1) 3 トレンチ上層 (西から) (2) 3 トレンチ全景 (西から)

図版7 (1) 4 トレンチ全景 (西から) (2) 5 トレンチ全景 (西から)

図版8 (1) 6 トレンチ全景 (西から) (2) 7 トレンチ全景 (西から)

図版9 (1) 7 トレンチ全景 (南から) (2) 7 トレンチ落ち込み SX05 (北から)

長岡京跡右京第 1016 次調査

図版10 (1) 調査地周辺の様子 (北東から) (2) 調査地全景 (東から)

図版11 (1) 1 トレンチ全景 (東から) (2) 土坑 SK01 (西から)

(3) 土坑 SK02 (西から)

図版12 (1) 土坑 SK03 (西から) (2) 1 トレンチ南壁の土層 (北から)

(3) 1 トレンチ西壁の土層 落ち込み SX04 (東から)

図版13 (1) 2 トレンチ全景 (東から) (2) 2 トレンチ南壁の土層 (北から)

図版14 (1) 2 トレンチ下層遺構 1 (南から) (2) 2 トレンチ下層遺構 2 (南から)

図版15 (1) 出土遺物-1 (2) 出土遺物-2

付 表 目 次

付表-1 本書報告調査地一覧表 il

付表-2 報告書抄録 21

挿 図 目 次

第 1 図 長岡京と調査地の位置 (1/40000)	iii
 長岡京跡右京第 1011 次調査	
第 2 図 発掘調査地位置図 (1/5000)	1
第 3 図 調査区平面・断面図 (1/50)	3
第 4 図 遺構断面図 (1/50)	4
 長岡京跡右京第 1014 次調査	
第 5 図 発掘調査地位置図 (1/5000)	5
第 6 図 発掘調査風景 (南から)	6
第 7 図 長岡第十小学校 4 年生の見学 (北東から)	6
第 8 図 調査トレンチ配置図 (1/200)	7・8
第 9 図 1 トレンチ平・断面図 (1/50)	9
第 10 図 2 トレンチ平・断面図 (1/50)	9
第 11 図 3 トレンチ平・断面図 (1/50)	11
第 12 図 4 トレンチ平・断面図 (1/50)	11
第 13 図 5 トレンチ平・断面図 (1/50)	12
第 14 図 6 トレンチ平・断面図 (1/50)	12
第 15 図 7 トレンチ平・断面図 (1/50)	13
 長岡京跡右京第 1016 次調査	
第 16 図 発掘調査地位置図 (1/5000)	15
第 17 図 周辺調査の状況 (1/2500)	16
第 18 図 1 トレンチ平・断面図 (1/150)	17
第 19 図 土坑 SK01 実測図 (1/50)	17
第 20 図 土坑 SK02 実測図 (1/50)	17
第 21 図 土坑 SK03 実測図 (1/50)	17
第 22 図 2 トレンチ平・断面図 (1/150)	18
第 23 図 土坑 SK05 実測図 (1/50)	18
第 24 図 出土遺物実測図 (1/4)	19

第1章 長岡京跡右京第1011次(7ANK SN-10地区)調査概要 —長岡京跡右京五条三坊四町、開田城ノ内遺跡—

1 はじめに

- 1 本報告は、2010年10月5日から10月8日まで、京都府長岡京市長岡二丁目431番の一部において実施した長岡京跡右京第1011次調査に関するものである。
- 2 本調査は共同住宅建設予定地のうち、土地所有者の居住部分が営利行為とは認められないため、この面積に関して国庫補助事業として調査を行った。他の部分に関しては今回の調査を踏まえて、協議の後調査を行っている。
- 3 本調査は、長岡京跡右京五条三坊四町（五条大路）および開田城ノ内遺跡に関する考古学的な資料を得ることを目的とし、調査対象地の北西隅に南北10m、東西2mの矩形トレンチを設定した。調査面積は20m²である。
- 4 発掘調査は、平成22年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会が主体となり、委託を受けた財団法人長岡市埋蔵文化財センターが実施した。現地での調査は同センター調査係主査の木村泰彦が担当した。
- 5 調査の実施にあたっては、土地所有者の方には水道水の提供をはじめとして多くのご協力を賜わった。また近隣地域の方々にも種々のご理解とご協力を賜った。
- 6 本報告の執筆・編集は木村が行った。



第2図 発掘調査地位置図(1/5000)

2 調査経過

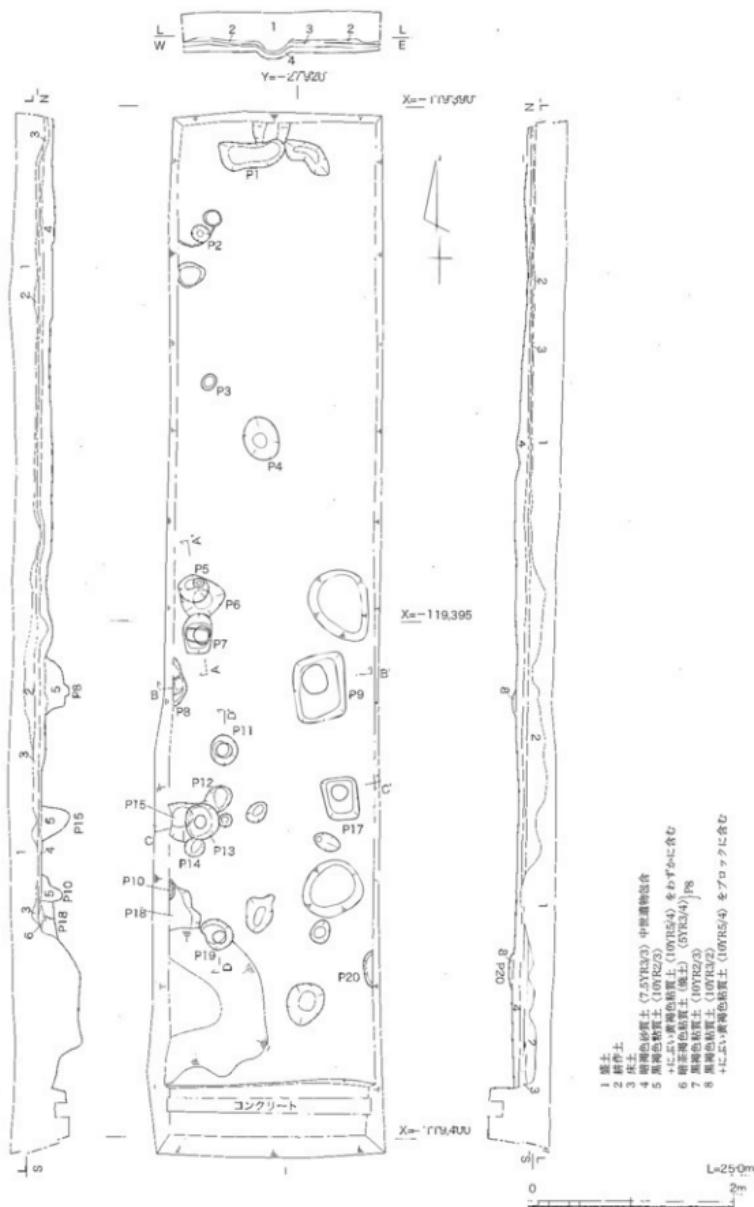
調査地は阪急長岡天神駅の北西 150 m の繁華街の中心に位置していて、当調査地のすぐ西側 30 m で行われた右京第 370 次調査では、中世、長岡京期、奈良時代、古墳時代、弥生時代の遺構が検出され、各時期共に貴重な成果が得られている。中世の遺構は小溝群と掘立柱建物、落ち込みなどが検出され、集落の存在も推定された。長岡京期では掘立柱建物、井戸、土坑の他に右京域では初めて五条大路の北側溝が確認され、長岡京の条坊復原のための貴重なデータとなった。奈良時代では中軸をそろえる総柱建物が 2 棟検出され、周辺の調査でも同様の建物が見つかっていることから大規模な倉庫群の存在が推定された。古墳時代では大型の竪穴住居を始め、掘立柱建物や土坑等が切り合いを持って検出され、また弥生時代後期の断面 V 字形の環濠や竪穴住居が見つかっていて、環濠によって囲まれた集落の存在が明らかとなった。さらに当地のすぐ南には周囲を土塁と堀で囲まれた開田城が存在しており、関連する施設の広がりも予想された。以上のように当調査地は各時代に渡って多くの成果が得られている地点であり、関連する遺構・遺物の検出の可能性が考えられた。調査は建物建設に伴い、営利施設以外の部分について国庫補助事業として調査を行い、調査地内の北西隅に南北 10 m、東西 2 m の長方形トレチを設定、重機により盛り土と旧耕作土と床土を除去し、以下は人力によった。調査面積は 20 m² である。当調査地は地形分類上緩扇状地に位置しており、地表面での標高は 25.2 m、調査地の中心国土座標値は、X = -119,395、Y = -27,920 である。

3 検出遺構

今回の調査地は以前に民家が存在しており、それらの解体・整地後に調査を行ったが、それ以前は水田としての利用がなされていた。調査地の基本層序は、0.2 ~ 3 m の解体・整地の下に 0.2 m の耕作土と床土があり、さらにその下に 0.1 m の中世遺物を含む暗褐色砂質土（第 4 層）が厚さ約 0.1 m で堆積している。このうち南端では、民家建設以前のコンクリート壁の基礎が残り、また部分的に民家解体時における植木の抜き取り痕等が認められた。これらを除去すると黄褐色粘質土の地山面にいたり、この面で遺構が検出された。遺構面での標高は 24.8 m である。検出された遺構はすべてピットであり、調査区の南半部でまとまって検出されている。これらピットの内、番号を付したものが遺物が出土したものである（第 3 図）が、各ピットの出土遺物はいずれも小片・少量で図示できるものはないためあわせて記述する。ピットは大半が平面円形のもので、隅丸方形のもので明確なものは 2 基（P-9・17）のみであった。

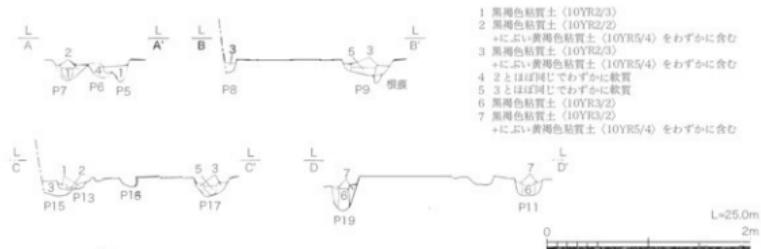
P-1 ~ 4 は調査区北半で検出されたもので、いずれも中世包含層と同様の暗褐色砂質土（第 4 層）を埋土としている。深さは 0.1 m 前後で柱痕もなく、調査地内では関連性は認め難い。いずれも土師器の小片が出土しており、P-2・4 からは須恵器甕片も出土している。

P-5 ~ 7 は調査区中央西寄りで検出されたもので、切り合いを有しており、P-6 がもっとも古い（第 4 図）。柱痕が確認できるのは P-7 のみである。P-5 は土師器、須恵器片、P-7



第3図 調査区平面・断面図 (1/50)

4 まとめ



第4図 遺構断面図 (1/50)

は土師器片、P-6からは古墳時代の須恵器杯蓋片が出土している。

P-8・9・17は平面隅丸方形ピットとその関連ピットである。P-9は南北0.65m、東西0.5m、深さ0.2mの長方形で、直径0.25mの柱痕が残る。P-8はP-9の西に位置することからP-9の関連ピットと判断したもので、距離は約1.3～1.5mである。いずれも土師器片のみ出土。P-17は南北0.4m、東西0.35m、深さ0.2mの一回り小さな長方形で、直径約1.5mの柱痕が残る。調査区では関連するピットは確認できなかった。土師器と須恵器の小片が出土している。

P-10～15は調査区南半西寄りで集中して検出された。これらも切り合を有し、P-13が新しく、P-15が古い。P-11・13は柱痕が残り、直径約0.25～0.3m、深さは0.15mである。P-15は直径0.35m、深さ0.2mである。いずれも土師器小片を含み、他にP-11からは鉄釘片が、P-13からは緑釉陶器と瓦器片が出土している。

P-18・19は調査区南西隅で植木抜き取り痕に切られる形で検出された。P-18は深さ0.1mの不整形な落ち込みで、焼土をわずかに含んでいる。土師器の小片が出土したのみで時期は不明である。P-19は直径約0.25m、深さは0.35mと最も深く、直径0.15mの柱痕が残る。なお北側のP-11との柱心心間の距離は1.1mである。柱痕、掘形共に土師器小片が出土している。また、包含層内からは、土師器、須恵器、瓦器等の他に平瓦片、製塙土器片も出土している。

4 まとめ

今回の調査では、小規模な調査面積ながらもピットがまとまって検出された。出土遺物が非常に少ないため、時期の決定は困難を伴うが、柱痕の平面形が隅丸方形のものが長岡京期、円形のものが中世、各ピットに切られている円形ピットが古墳時代の可能性が考えられる。従って当初予想された密度ではないものの、少なくとも3時期の遺構が分布していることが判明した。今回の調査では面積が狭く、遺構の広がりやピット等のまとまりは不明な点が多いが、土地所有者の居住部分以外については、その後、右京第1012次調査として実施しており、詳細については財團法人長岡市埋蔵文化財センター年報平成22年度に報告する予定である。

注) 山本輝雄・木村泰彦「右京第370次調査概報」『長岡市センター年報』平成3年度 1993年

第2章 長岡京跡右京第1014次(7ANGMD-2地区)調査概要 —長岡京跡右京二条三坊七・八町、上里遺跡—

1 はじめに

- 1 本報告は、2010年11月29日から2011年1月13日まで、京都府長岡市井ノ内的田6番地において実施した長岡京跡右京第1014次調査に関するものである。
- 2 本調査は、長岡京跡右京二条三坊七・八町（二条条間北小路）および上里遺跡に関する考古学的な資料を得るために実施したものである。調査トレンチは南北7ヶ所に設定し、総調査面積は54 m²である。
- 3 発掘調査は、遺跡の保存のため基本的に面的な掘り下げは長岡京期までとし、それ以前の遺構や遺物に関しては、断ち割りによって確認することとした。
- 4 発掘調査は、平成22年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会から委託を受けた財團法人長岡市埋蔵文化財センターが実施した。現地での調査は同センター調査係主査の木村泰彦が担当した。
- 5 発掘調査にあたっては、土地所有者をはじめ周辺の方々には種々のご理解とご協力を賜った。
- 6 本報告の執筆・編集は木村が行った。



第5図 発掘調査地位置図 (1/5000)

2 調査経過

今回の調査地は西山丘陵から東に発達した低位段丘の東端、小畠川によって形成された氾濫原に位置している。現在周辺は水田及び畑地が広がる一帯である。1979年に当地の南側にある長岡第十小学校建設に伴って実施された右京第22・25次調査では、長岡京期でも有数の大規模な掘立柱建物が検出され、二町以上の宅地利用がなされていると見られることから、貴族の邸宅ないし官衙の正殿ではないかと考えられている。また同時に縄文時代後期～奈良時代にかけての遺構・遺物が確認されて上里遺跡として周知されることとなった。その後当地の北側で財団法人京都都市埋蔵文化財研究所によって行われた道路建設に伴う右京第878・903次調査では、長岡京期の条坊・建物・井戸などが確認され、長岡京右京域では最も北側で確認された遺構群となっている。また下層からは縄文時代晚期から弥生時代前期にかけての住居や墓が見つかり、上里遺跡が大規模な集落であることが判明した。

今回の調査地はこれらの間にある南北に細長い水田で、長岡京跡の右京二条三坊七・八町に当たり、さらに二条三条間北小路が想定される場所である。また上述のように調査地の南と北で上里遺跡の関連遺構が検出されていることから、それらに関する遺構・遺物の広がりを確認することを目的として調査を行った。調査は南北約110mの水田に、約11～14m間隔で7つのトレチを設定し、北から南へ1～7トレチとした。このうち1～4トレチは周囲で畑作が行われている関係上、南北3m、東西2mの長方形とし、5～7トレチは3m四方の方形トレチとして設定した。調査は北側より小型重機により順次耕作土・床土を除去し、それ以下はすべて人力によって行った。耕土は耕作土とそれ以外の土に分けて掘り上げ、調査終了後は再び人力によって埋め戻しを行い旧状に復している。また調査中には長岡第十小学校4年生の歴史授業の一環として現地見学が実施された。

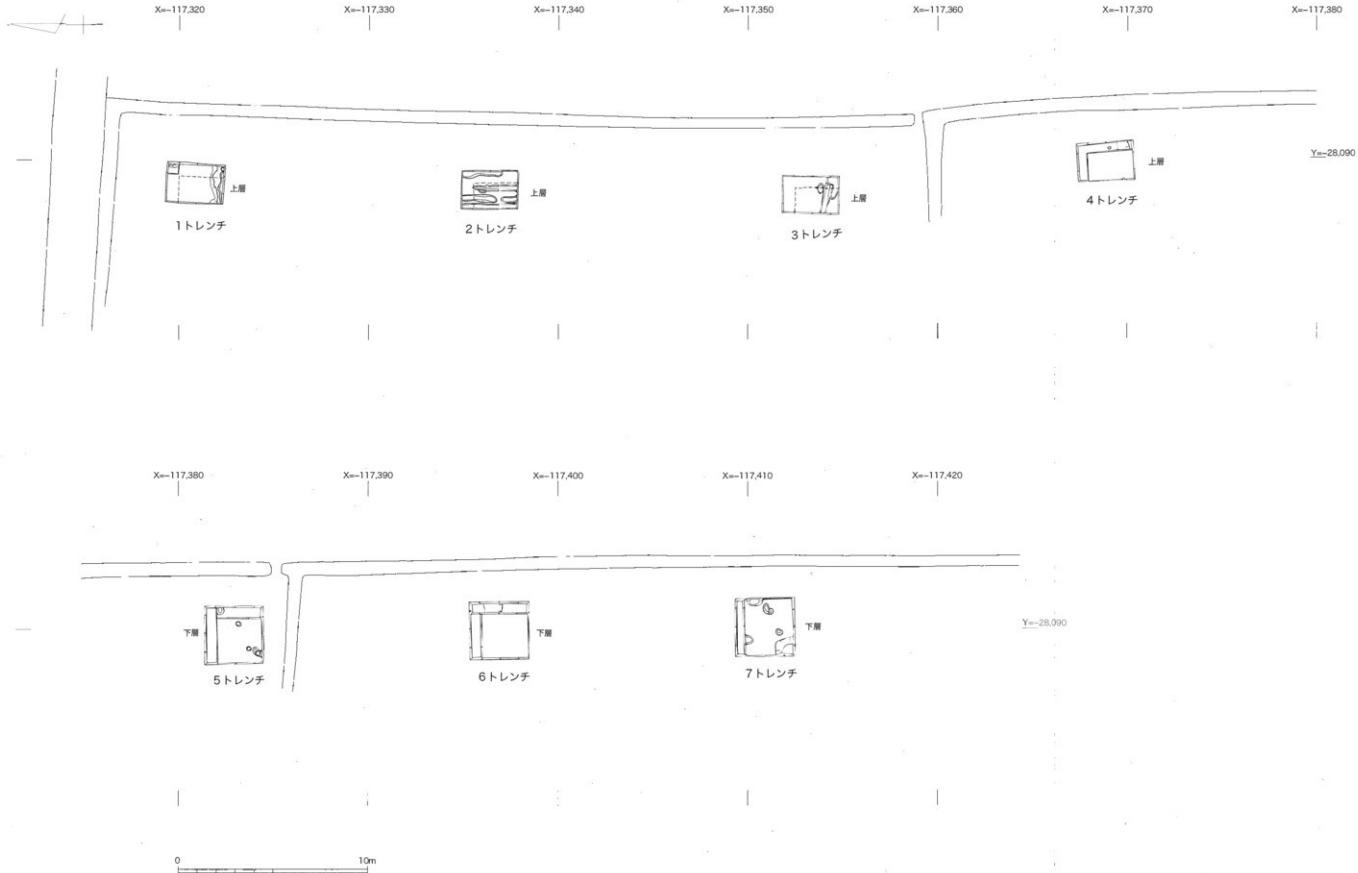
各トレチの調査面積は、1トレチ6.4m²、2トレチ6.1m²、3トレチ6.1m²、4トレチ6.3m²、5トレチ9.7m²、6トレチ9.6m²、7トレチ9.8m²で、総調査面積は54m²である。周辺の標高は、1～3トレチで35.4m、4・5トレチで35.3m、6・7トレチで35.25mである。調査地の中心座標はX= -117,370、Y= -28,090である。



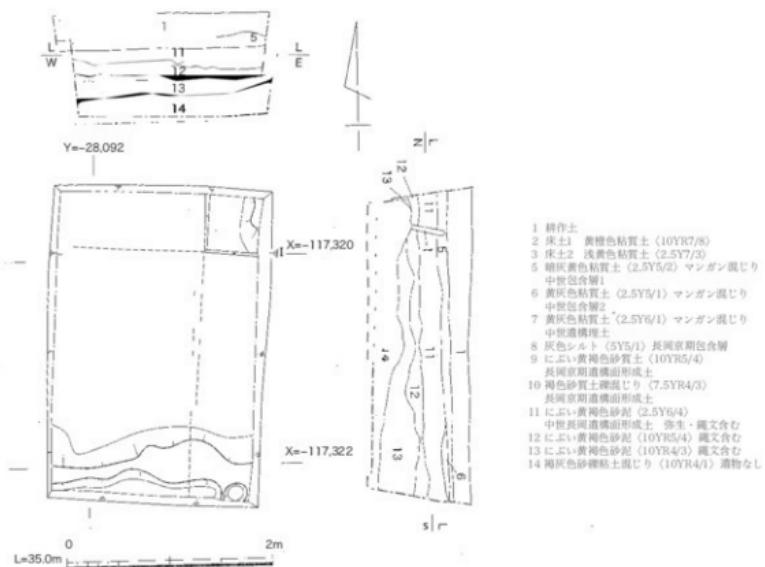
第6図 発掘調査風景（南から）



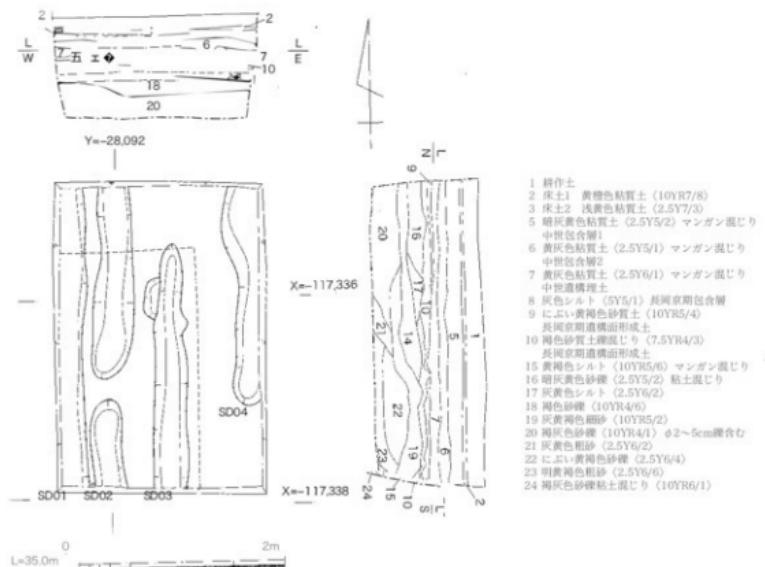
第7図 長岡第十小学校4年生の見学（北東から）



第8図 調査トレンチ配置図 (1/200)



第9図 1トレンチ平・断面図 (1/50)



第10図 2トレンチ平・断面図 (1/50)

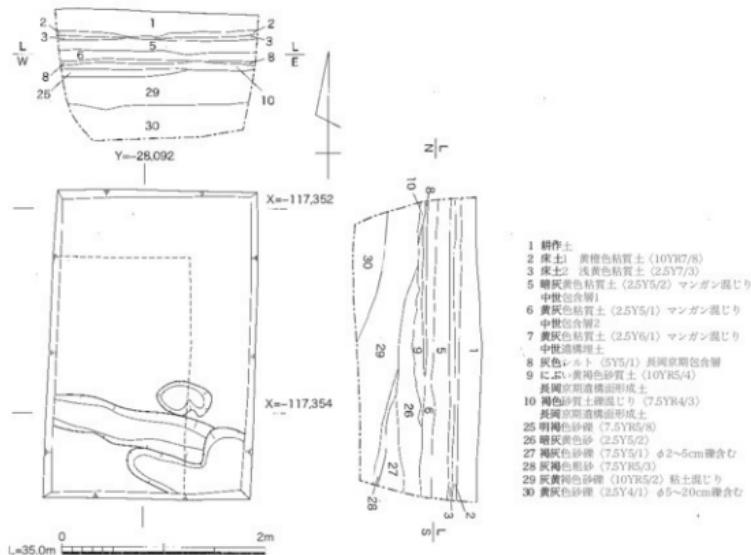
3 検出遺構

1トレンチ 調査地の一番北側に設定したトレンチである。約0.25mの耕作土の下に0.1mの中世遺物を含む暗灰黄色粘質土(第5層)が存在し、にぶい黄褐色砂泥(第11層)にいたる。北側10m地点で行われた京都市の調査成果と合わせ、この面が長岡京期の遺構面に相当するとみられる。標高は35.1mである。南東隅で直径約0.2mの鎌倉時代と見られる円形ピットを確認しているが遺物は出土していない。なお長岡京期の遺構は検出されなかった。その後この調査区のみ第11層を掘り下げて下層遺構の確認を行った。その結果にぶい黄褐色砂泥の面となり、調査区の南辺部では高さ0.05~0.1mの畦状の起伏が認められた。これも京都市の成果と合わせると弥生時代遺構面とみられるが、顯著な遺構は認められなかった。標高は南西で35.0m、北東部で34.9mである。さらにこの面から北辺と東辺に断ち割りを入れて下層の確認を行ったところわずかに色調の異なる黄褐色砂泥が2層(第12・13層)堆積しており、いずれも縄文土器の小片を含んでいた。この下には遺物を含まない褐色砂礫粘土混じり(第14層)が北東から南西に堆積しており、現地表下1mまで掘り下げ確認を行った。断ち割り部分では顯著な遺構・遺物は確認されていないが、縄文時代の包含層の広がりは確認することができた。

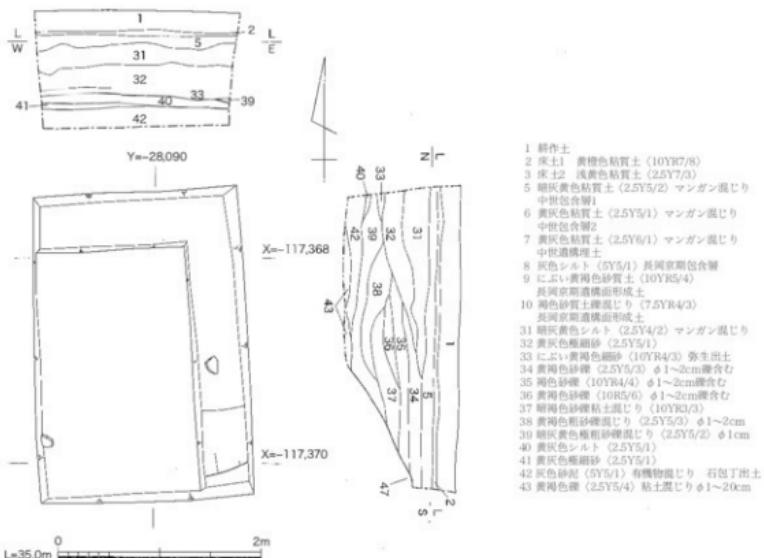
2トレンチ 1トレンチの南約12mの地点に設定したトレンチである。約0.25mの耕作土の下に薄い床土(第2層)があり、2層の中世遺物を含む暗灰黄色粘質土と黄灰色粘質土(第5・6層)が厚さ約0.2mで堆積している。これを除去した段階で南北方向の小溝4条を検出した。溝はいずれも幅約0.3m前後、深さ0.1mで部分的に途切れている。埋土は黄灰色粘質土(第7層)で、遺物は土師器、須恵器の小片が出土している。この面を構成しているのは厚さ約0.15mのにぶい黄褐色砂質土(第9層)と褐色砂質土礫混じり(第10層)であり、標高は35.0mである。これらを北辺と東辺で断ち割ると、下層はすべて砂礫層の堆積となる。状況から古い流路が存在したものと考えられ、1トレンチで確認された縄文時代の包含層の堆積は認められなかった。

3トレンチ 2トレンチの南14mに設定したトレンチである。耕作土と床土の下に、厚さ0.2~0.25mの中世遺物を含む第5・6層が堆積しており、その下からは第6層を埋土とする東西方向の溝と不整形な落ち込みが検出された。溝は幅約0.3m、深さ0.1mでやや東で南に振れている。周囲の落ち込みも深さ約0.1mで遺物は出土していない。この下には調査地北東部を中心とし長岡京期の遺物を含む灰色シルト(第8層)が薄く堆積していたが、長岡京期の遺構は検出されなかった。これらの遺構面を形成している第9・10層の標高は34.9mである。その後北・東辺を断ち割り、下層の状況を確認したところ、2トレンチと同様にすべて流路堆積とみられる砂礫層で占められていた。確認される礫は2トレンチよりも大きく、特に断ち割り部の最下層で確認した黄灰色砂礫(第30層)では直径約20cmの大型の礫を多く含んでいた。

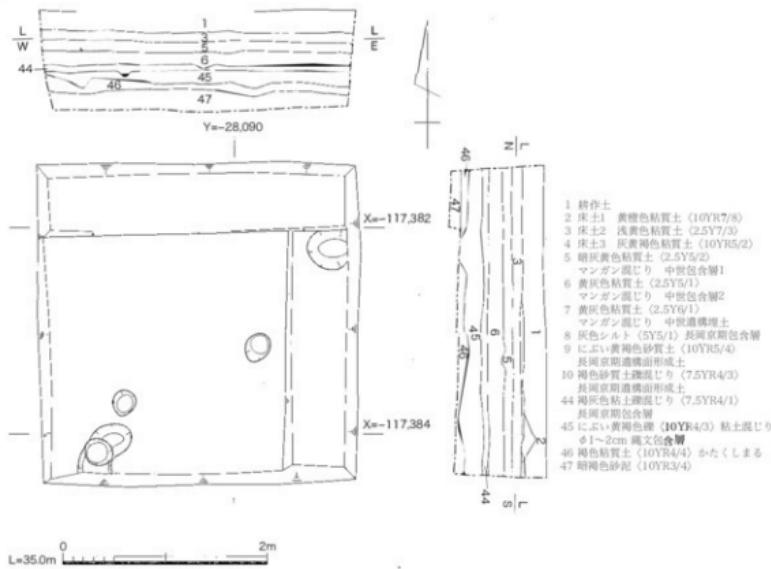
4トレンチ 3トレンチの南12mの水田部分に設定したトレンチである。耕作土・床土の下に中世包含層(第5層)があり、それを除去するとすぐにシルトと砂礫の流路堆積が現れる。この面での標高は35.1mである。その後北辺と東辺で断ち割りを行ったところ、東辺部の南側で



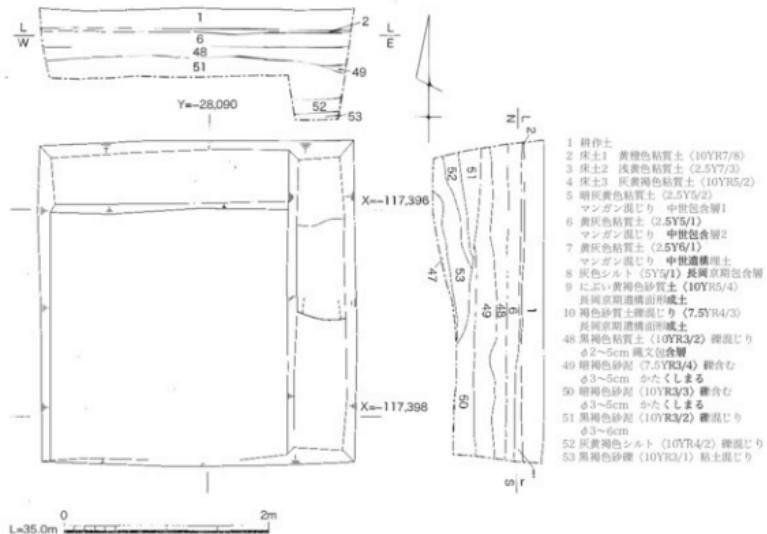
第 11 図 3 トレンチ平・断面図 (1/50)



第 12 図 4 トレンチ平・断面図 (1/50)



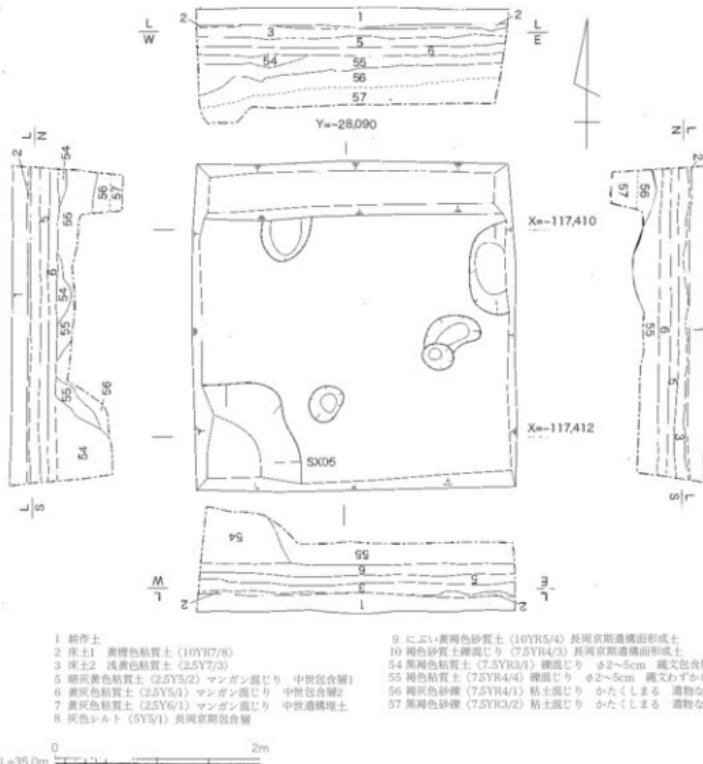
第13図 5トレンチ平・断面図 (1/50)



第14図 6トレンチ平・断面図 (1/50)

流路の南肩を確認した。南肩は緩やかに北側に落ち込んでおり、ベースは5トレンチで確認されている暗褐色砂泥（第47層）である。流路の埋土は上層では砂とシルトが中心で（第31～33層）、肩部付近は砂礫が多くなり（第34～39層）、その下ではシルトや有機物を含んだ砂泥（第40～42層）が確認される。流路内からは石包丁や土師器片などが少量出土している。

5トレンチ 4トレンチの南11mの水田部分に設定した。耕作土、床土、2層の中世遺物包含層（5・6層）の下に薄く長岡京期の遺物を包含する褐色粘土疊混じり（第45層）があり、それを除去したところで円形及び不整形な落ち込みを検出した。標高は34.7mである。落ち込み内から遺物は出土しておらず、性格は不明である。その後北辺と東辺で断ち割りを行ったところ、下層に縄文土器の小片をわずかに含んだ厚さ0.15～0.2mのにぶい黄褐色疊（第45層）があり、北東隅で直径約0.4m、深さ約0.1mの浅い落ち込みを確認している。この面での標高は約34.6mである。なお遺物は出土していない。その下の褐色粘質土は非常に硬く締まり、遺構・遺物は確認出来ていない。



第15図 7トレンチ平・断面図 (1/50)

6トレンチ 5トレンチの南11mに設定。耕作土、床土、中世包含層の下で長岡京期とみられる平坦面を確認するも遺構は確認できなかった。標高は34.9mである。この面を形成する黒褐色粘質土礫混じり（第48層）は厚さ0.15mで縄文土器片をわずかに含む。断ち割りで下層から硬く締まった暗褐色砂泥（第49層）を確認したがこの面でも遺構は検出されていない。

7トレンチ 6トレンチの南11mに設定した。耕作土、床土の下に中世遺物包含層（5・6層）があり、これらを掘り下げると黒褐色粘質土と褐色粘質土礫混じり（第54・55層）の面となる。この面は中世ないし長岡京期と思われるが遺構は検出されていない。標高は34.8mである。第54・55層は縄文土器を含んでおり、これらを掘り下げたところ褐灰色砂礫粘土混じりの硬く締まった面にいたり、円形ないし不整円形の落ち込みが確認された。大半は深さ0.1mの浅いものであるが、南西隅では直径1m以上、深さ0.5mの大型の落ち込みSX05が検出された。SX05のみ縄文土器の小片が少量出土している。

4 出土遺物

今回の調査で出土した遺物はコンテナ1箱と少量であった。各トレンチから出土しているが、中世包含層のものが最も多く、次いで長岡京期包含層、縄文時代包含層の順となる。瓦器、白磁、綠釉陶器、土師器、須恵器、弥生土器、縄文土器、瓦、石錘、サヌカイト片などを確認しているが、現在整理中であり、詳細に関しては次年度に報告を行う予定である。

5 まとめ

今回の調査では、面積の関係もあるため顕著な遺構は検出されなかつたが、長岡京期の包含層と遺構面、鎌倉時代の遺構、縄文時代の遺物包含層と遺構面、落ち込みなどを確認した。

長岡京期の遺構は今回の調査トレンチ内では確認できなかつたが、3・5トレンチでは比較的まとまって遺物が出土しており、周辺の調査結果からも遺構の存在は明らかであると思われる。

上里遺跡に関するものとしては、北側に設定した1トレンチでは京都市域で確認されている弥生時代と縄文時代の包含層の広がりを確認することができた。しかし遺構に顕著なものは無く、遺物も少量であった。それより南側の2～4トレンチでは流路堆積が確認されたのみで古い遺構は確認できなかつたが、5～7トレンチでは縄文時代の包含層と遺構面から落ち込みなどを検出した。性格の不明なものが多いが、当初の予想通り、遺跡の広がりは確認することができた。ただし後期から晩期に至る縄文集落の時期的な変遷や、居住域と墓地との関連などの問題は、今後の課題として残されている。

注1) 山本輝雄「長岡京跡右京第22・25次調査報告書」『長岡京市センター報告書』第11集 1997年

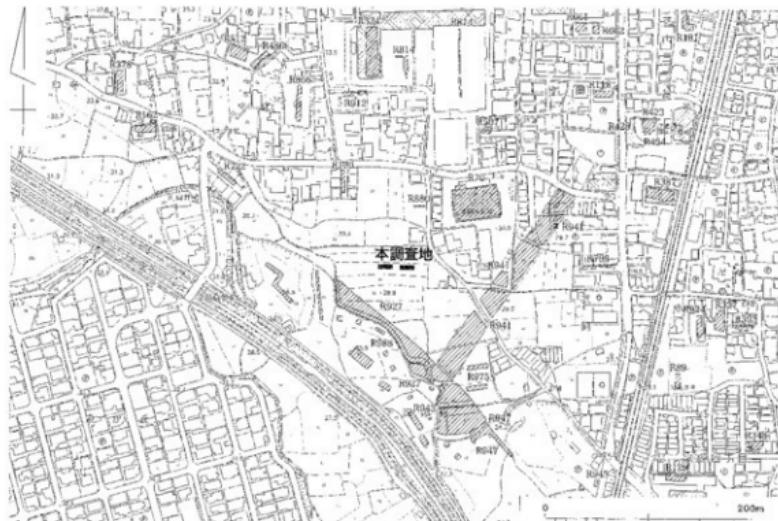
2) 上村和直・南出俊彦「長岡京右京二条三坊八・九町跡、上里遺跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2006-34 2007年

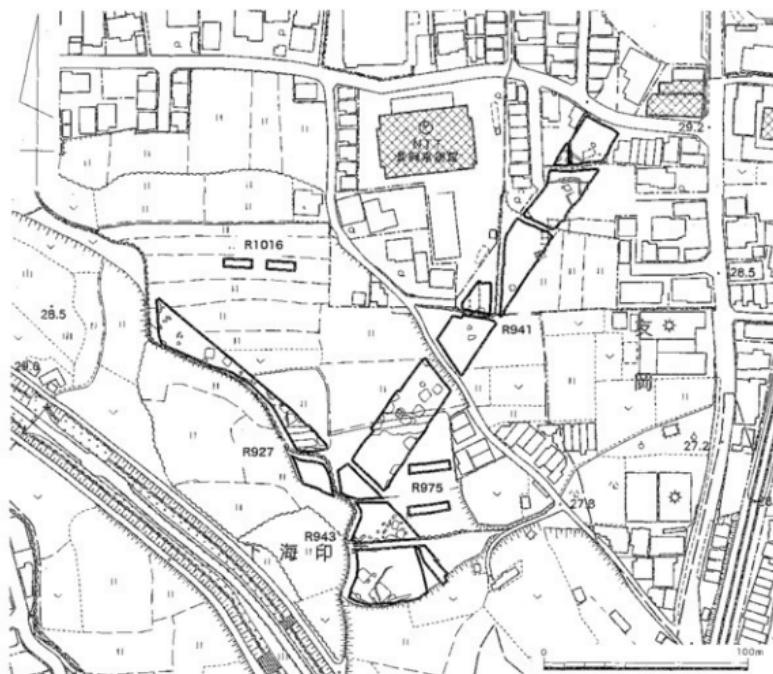
高橋 潔・津々池惣一・大立目一「長岡京右京二条三坊八・九町跡、上里遺跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告』2007-12 2008年

第3章 長岡京跡右京第1016次(7ANOOD-11地区)調査概要 —長岡京跡右京八条三坊十六町、伊賀寺遺跡—

1 はじめに

- 1 本報告は、2010年12月13日から2011年1月25日まで、京都府長岡京市下海印寺下内田14-1番地で実施した長岡京跡右京第1016次調査に関するものである。
- 2 本調査は、長岡京跡右京八条三坊十六町の構造および縄文時代・伊賀寺遺跡の広がりを確認するために実施したものである。調査トレンチは東西に2ヵ所設定し、調査面積は合わせて112 m²であった。
- 3 調査の方法は、遺跡の保存のため面的な掘り下げは長岡京期までとし、長岡京以前の遺構や遺物に関しては、断ち割りによって確認することとした。なお検出された遺構は保存のため完掘していない。
- 4 発掘調査は、平成22年度国庫補助事業として長岡京市教育委員会から委託を受けた財団法人長岡京市埋蔵文化財センターが実施したもので、現地での調査は同センター事務局長の小田桐淳が担当した。
- 5 発掘調査にあたっては土地所有者をはじめ、周辺の方々に様々なご理解とご協力を賜った。また京都府土木事務所からは駐車場の便宜を賜った。
- 6 本報告の執筆・編集は小田桐が行った。





第17図 周辺調査の状況 (1/2500)

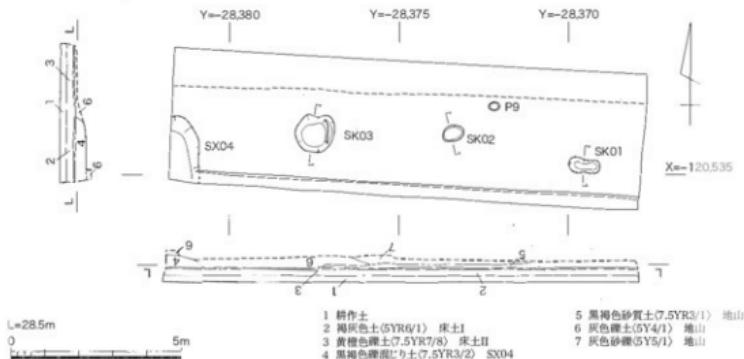
2 調査経過

当地は長岡京跡右京八条三坊十六町にあたるとともに、縄文時代・古墳時代・奈良～江戸時代の集落跡である伊賀寺遺跡にもあたっている。地形的には小泉川左岸の低位段丘Ⅱにあたっており、小泉川によって形成された河岸段丘の二段目の崖面を降りたところである。

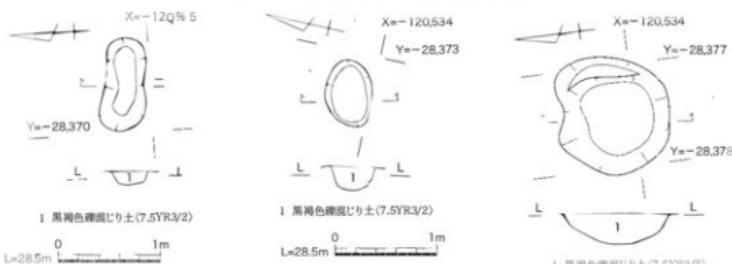
京都府による京都第二外環状道路建設に伴う最近の調査では、奈良時代から長岡京期とみられる掘立柱建物や溝跡、古墳時代の竪穴住居、弥生時代の竪穴住居、縄文時代中期・後期の集落跡などが相次いで発見され、特に縄文時代集落に関しては、中期の石廻い炉を設置した竪穴住居や、後期の火葬骨を埋納した墓跡などが発見されるとともに、後期の集落内では玉類を製造していたことが判明したなど、伊賀寺遺跡は全国的に注目されるに至った。⁽¹⁾

そこで長岡市教育委員会では、長岡京跡の南西部での実態と縄文時代集落の広がりを明らかにするため、昨年度から国庫補助事業による調査を開始し、今回が二回目の調査となる。昨年度に実施した右京第975次調査では、縄文時代中期から後期の遺物包含層および集石構造、土坑などが検出され、多くの資料が確認されている。⁽²⁾

調査地は東西に細長い一枚の水田であるため、まず調査区を設定する範囲の耕作土を南北に寄



第18図 1トレンチ平・断面図 (1/150)

第19図 土坑SK01実測図
(1/50)第20図 土坑SK02実測図
(1/50)第21図 土坑SK03実測図
(1/50)

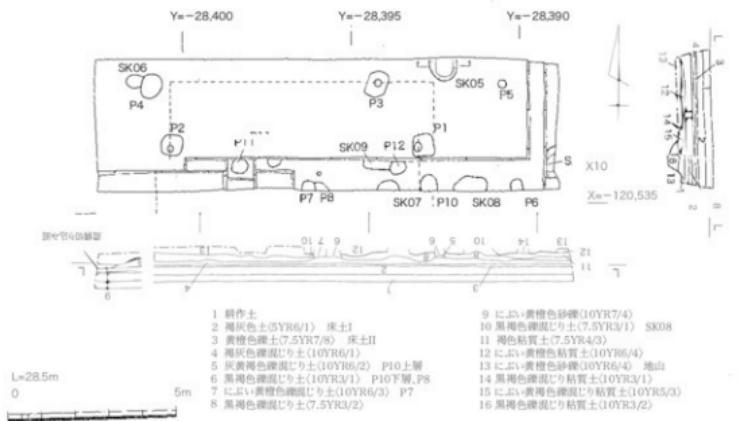
せ集め、床土の上面で調査区の設定を行った。調査区は南北4m×東西14mのトレンチを東西に2ヶ所と、掘削した床土置き場、床土以下の掘削土置き場を設定した。なお1トレンチでは遺構密度が稀薄であったため、床土以下の掘削土置き場をトレンチ北部の遺構が存在しない部分に置いた。2トレンチでは床土以下の掘削土が予想より多くなったため、途中1トレンチを先に埋め戻し、新たに床土以下の掘削土置き場を確保した。

3 検出遺構

1トレンチ 耕作土、床土I、IIを除去すると、砂礫層の面となる。トレンチ南端の断ち割りにより、この砂礫層は段丘礫の地山層であることが判明した。この地山面からは土坑3基と小柱穴、落ち込みが検出された。

土坑SK01～03はいずれも小規模な土坑で、埋土は黒褐色礫混じり土で共通している。出土遺物は少ないが、歴史時代の赤灰色を呈した精良な胎土の土師器片が出土している。

落ち込みSX04はトレンチ西端で西落ちの肩が検出された。深さは0.4mほどで2トレンチに



第22図 2トレーンチ平・断面図(1/150)

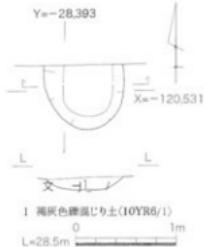
統くと考えられる。埋土は土坑と共に通している。

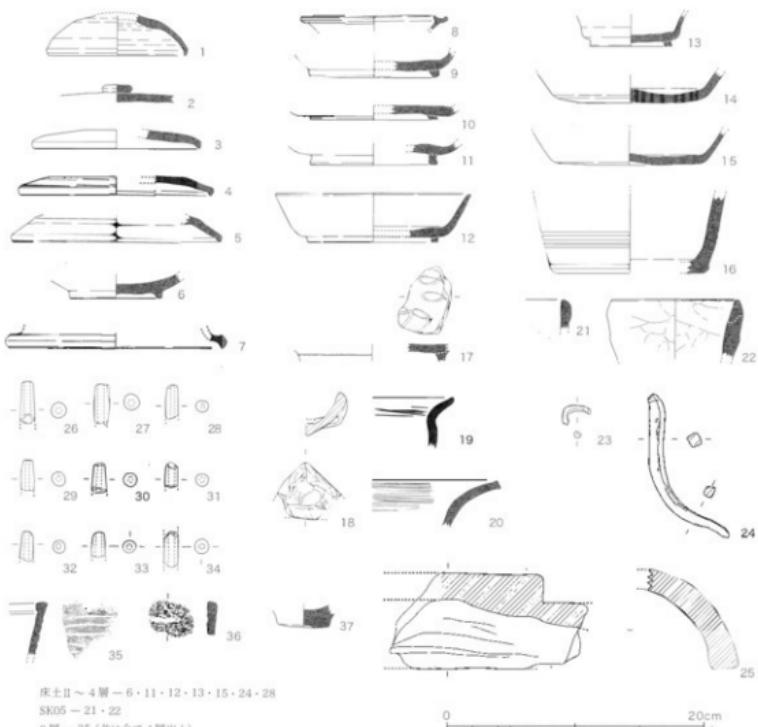
1トレーンチの段丘礫層の状況から、本来の段丘崖はSX04付近まで張り出していたものと予想される。

2トレーンチ 耕作土・床土I、IIの下では、南壁の断ち割りにより、4、8、9、11、12層の遺物包含層が認められた。4層上面では遺構が検出されなかつたため4層を掘り下げ、8層上面で辺0.7m前後の方形掘方の柱穴を3基と土坑を検出した。P1～3を1棟の掘立柱建物の一部と考えると、梁間2間以上(1.9m)、桁行4間(1.95m)の正方位を向く東西棟が想定できる。しかし検出された柱穴が少ないと可能性に留めておきたい。

下層の調査は、上層遺構を破壊しない範囲で南壁沿いの断ち割りを拡張する形で行った。8層下面でも柱穴や土坑の輪郭が多数検出された。なおP8以東の遺構は12層を切り込んでおり、以西は12層がないため、地山である13層に切り込んでいる。これらの遺構は、保存のために輪郭を一段下げた段階で止めてある。遺構の存在しない部分に限ってさらに掘り進め、地山層の確認を行った。地山面が確認できたのはトレーンチ西辺と、南辺のP7以西のみである。

2トレーンチで検出された柱穴や土坑などの時期は、遺物包含層や遺構の一段下げによって出土した遺物により、1トレーンチと同様に歴史時代(飛鳥～奈良時代)と考えられる。縄文時代の遺構については、遺物包含層の時期から地山面に切り込む形で検出されると考えられる。今回の調査区では上層遺構を保存した上で確認できた地山面が非常に小面積であるため、有無を検証するまでには至らなかった。

第23図 土坑SK05
実測図(1/50)



第24図 出土遺物実測図 (1/4)

4 出土遺物

今回の調査で出土した遺物はコンテナにして2箱ほどの量で、全てが小片である。大半は2トレンチで出土しており、4層から最も多く出土している。

今回の調査で出土した最も時期の新しい遺物は6の無釉陶器で、床土IIと4層の境界付近から1点のみ出土した。他の遺物は、須恵器や土師器の特徴から、概ね飛鳥時代から奈良時代にかけての時期におさえられる。長岡京期の特徴をもつ遺物は出土していない。サヌカイト剥片は耕作土以下各層に混入して一定量出土している。縄文土器の出土は数片のみであり、これも混入していたものである。

須恵器では杯類を中心に出土している。1は杯H蓋、2～5は杯B蓋である。2が灰白色を呈する軟質の焼成である他は青灰色の硬い焼成である。3・4は口縁端部から体部にかけてなだらかに移行している。8は杯Hで、軟質の焼成となっている。9～13は杯Bである。高台から体部にかけて緩やかに丸みをもって立ち上がる。特に10は高台が底部の中心寄りに付けられていて

る。14・15は杯Aである。14は灰白色を呈する軟質の焼き上がりとなっている。16は壺類の体部下半で、体部下部には浅い沈線が二条施されている。体部から底部にかけてはヘラケゼリされている。

土師器は細片が多く、器形の判明するものは少ない。17は杯Bの底部で、内面には螺旋状に暗文が施される。赤灰色を呈する精良な胎土である。18は壺の把手で、19は壺、20は鍋の口縁部である。21・22は製塙土器の口縁である。製塙土器片は比較的多く出土している。26～34は土鍤である。9点出土したが全て破損している。

23・24は鉄製品で、24は釘と考えられる。25は丸瓦の玉縁部である。石粒が多い荒い胎土で、表面には煤が吸着する。他にフイゴの破片と炉壁片が4層を中心に出土している。フイゴは8層からも出土しており、今回報告する土器と共に搬するものと考えられる。

7は高杯脚部片である。長脚二段透かしになると考えられる。他に6世紀代の杯蓋片も出土している。35・36は繩文土器で、口縁部外面に凹線文が施されており、宮滝式になると考えられる。他にサヌカイト剥片が多数出土している。37は平底の底部片で、弥生時代のものであろう。

5 まとめ

今回の調査は、保存を前提とした上で長岡京跡と繩文時代伊賀寺遺跡という二遺跡についての情報を収集するというものであった。ここでは判明したことをまとめておきたい。

調査地は段丘地形で、現在では1トレンチの北東20mに段丘崖があり、一段高くなっている。しかし1トレンチの調査から、本来はSX04の肩付近に崖面があったことが推定された。この崖が削されたのはSK01～03が掘られた時期頃からと推定される。

2トレンチでは、二面の遺構面が確認された。しかし長岡京期の遺物は出土せず、遺構面を覆う4層および遺物包含層から出土する遺物が飛鳥・奈良時代のものであることから、遺構の年代も奈良時代を中心とするものと解釈されよう。右京第941次調査などでは長岡京期の遺構も検出されているので、今後周辺での調査の課題となる。今回奈良時代の遺物に伴ってフイゴや炉壁が出土していることから、奈良時代伊賀寺遺跡について、特に南東約200mに所在する柄岡廃寺との関係は検討を要する。

繩文時代に関しては、混入ではあるが遺物が当地まで散布していることが判明した。しかし後期集落の範囲が当地まで広がるかどうかは判断できない。

注1) 岩松 保・中川和哉・森島康雄「大山崎大枝線道路改良事業関係遺跡発掘調査報告」『京都府センター報告集』第133冊 2009年

中川和哉『京都府センター報告集』第136冊 2010年

増田孝彦・黒坪一樹「長岡京跡右京第941次・友岡遺跡・伊賀寺遺跡発掘調査報告」『京都府センター報告集』第137冊 2010年

2) 小田桐 淳「長岡京跡右京第975次調査概要」『長岡市報告書』第55冊 2010年

付表-2 報告書抄録

ふりがな	ながおかきょうしぶんかざいちょうさほうこくしょ
書名	長岡京市文化財調査報告書
開書名	
シリーズ名	長岡京市文化財調査報告書
シリーズ番号	第59冊
編著者名	小田桐淳、木村泰彦
編集機関	財團法人長岡京市埋蔵文化財センター
所在地	〒617-0853 京都府長岡京市奥海印寺東条10番地の1

所収遺跡名	所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
長岡京跡 開田城ノ内遺跡	長岡京市 長岡二丁目	ながおかきょうしょ 長岡市 長岡二丁目	26209	107	34° 55' 24"	135° 41' 40"	2010.1.05 2010.1.08	20 m ² 遺跡確認 調査
長岡京跡 上里遺跡	長岡京市 井ノ内田 6番地	ながおかきょうしょ 長岡市 井ノ内田 6番地	26209	107 7	34° 56' 29"	135° 41' 33"	2010.1.29 2011.1.13	54 m ² 遺跡確認 調査
長岡京跡 伊賀寺遺跡	長岡京市 下海印寺下内 由14-1番地	ながおかきょうしょ 長岡京市 下海印寺下内 由14-1番地	26209	107 96	34° 54' 47"	135° 41' 22"	2010.1.23 2011.1.25	112 m ² 遺跡確認 調査

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長岡京跡 (右京第1011次)	都城	長岡京期	柱穴	須恵器、土師器、縄釉陶器	古墳時代、長岡京期、鎌倉時代の柱穴を確認
開田城ノ内遺跡	集落	古墳・鎌倉	柱穴	陶器、瓦器	
長岡京跡 (右京第1014次)	都城	長岡京期	落ち込み、柱穴	瓦器、白磁、縄釉陶器、土師器、須恵器、縄文土器、サヌカイト	長岡京期、鎌倉時代の遺構面と流路、縄文時代包含層、落ち込みを確認
上里遺跡	集落	縄文・弥生・鎌倉	溝、流路、落ち込み		
長岡京跡 (右京第1016次)	都城	長岡京期		土鍋、フイゴ、炉壁、縄文土器、サヌカイト	鞘岡庵寺との関連が考えられる
伊賀寺遺跡	集落	奈良時代	柱穴、土坑		

*緯度、経度の測点は調査区の中心で、国土座標の旧座標系を使用している。

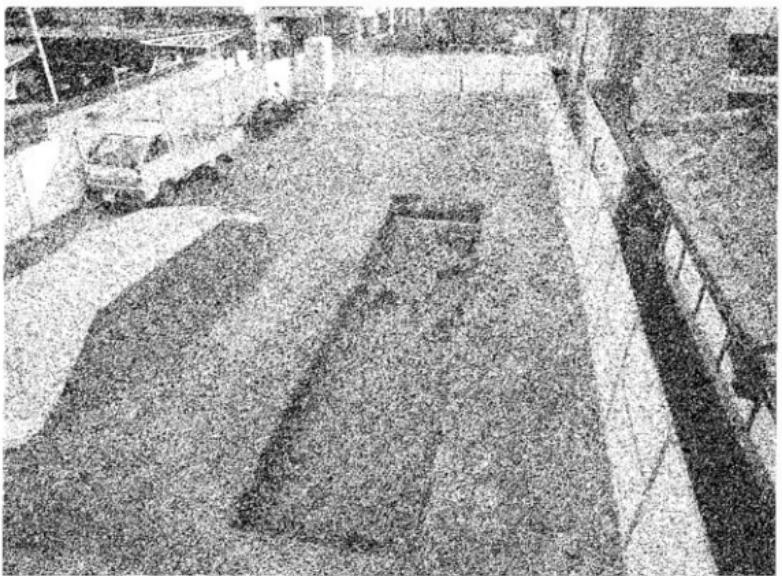
図 版

長岡京跡右京第 1011 次調査

図版一



(1) 調査地全景（南から）



(2) 調査地全景（北西から）

長岡京跡右京第 1014 次調査

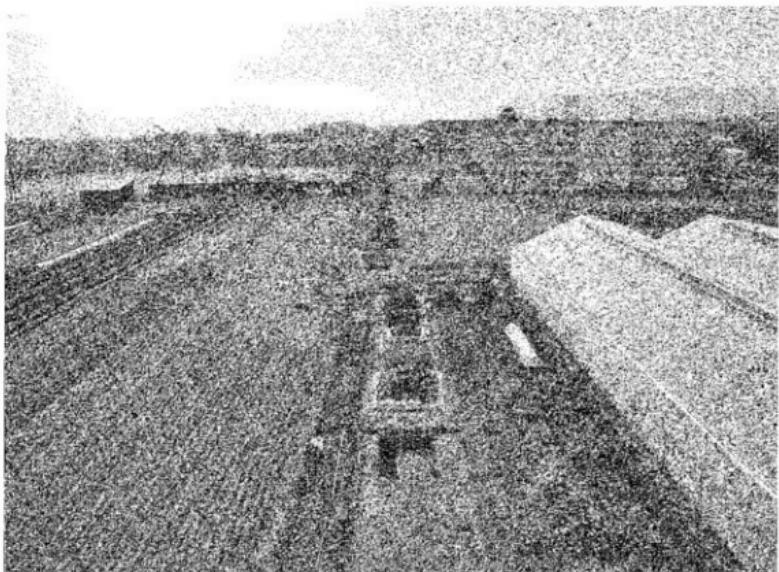
図版
一



調査地全景（南から）

長岡京跡右京第 1014 次調査

図版三



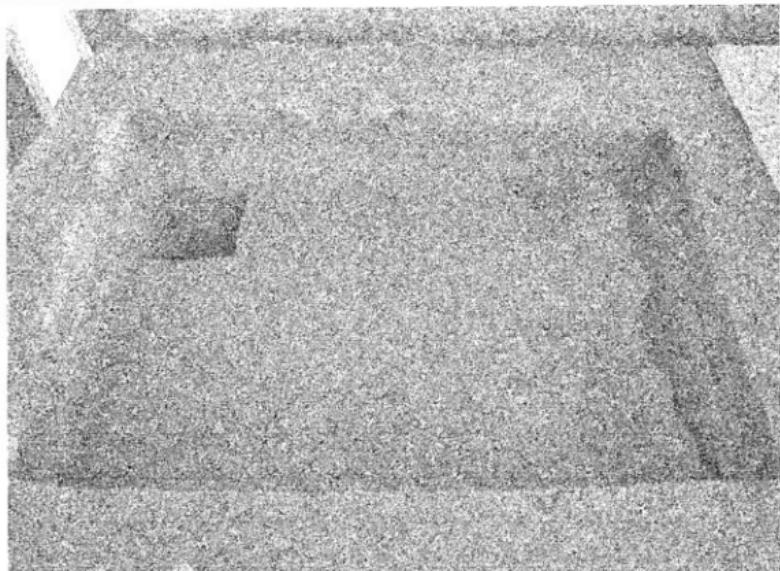
(1) 調査地全景（北から）



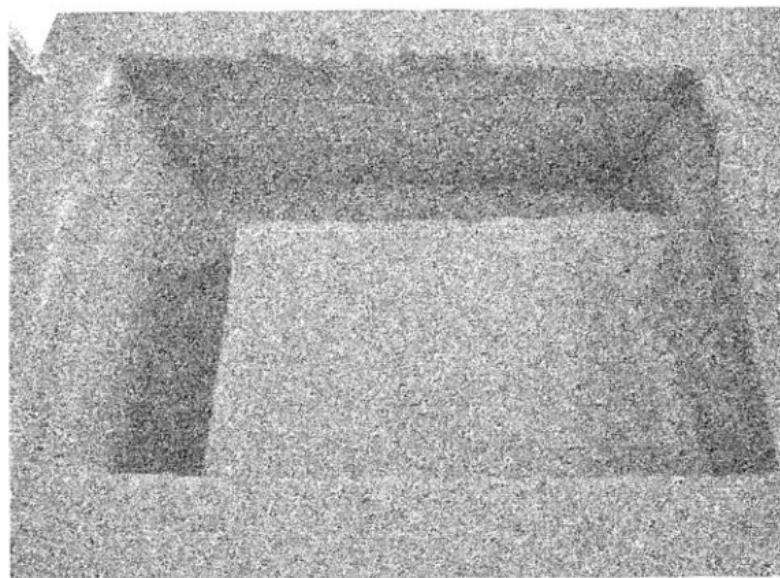
(2) 調査地遠景（北東から）

長岡京跡右京第 1014 次調査

図版四



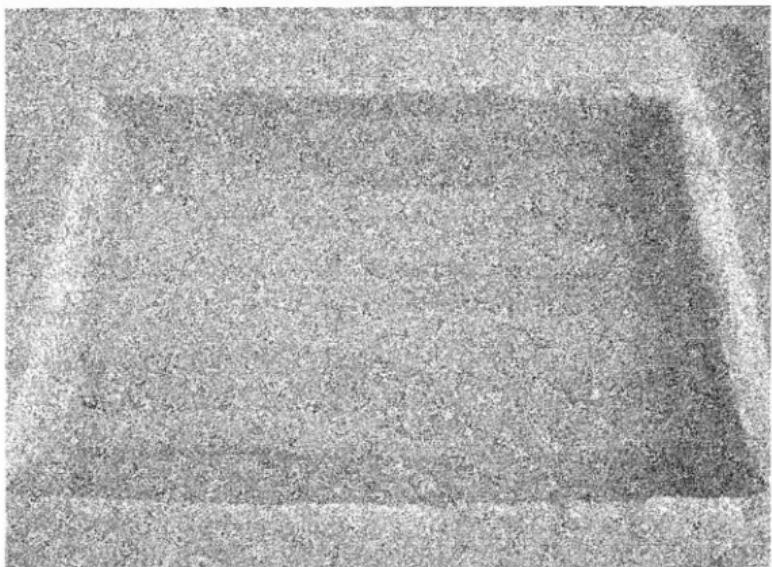
(1) 1トレンチ上層（西から）



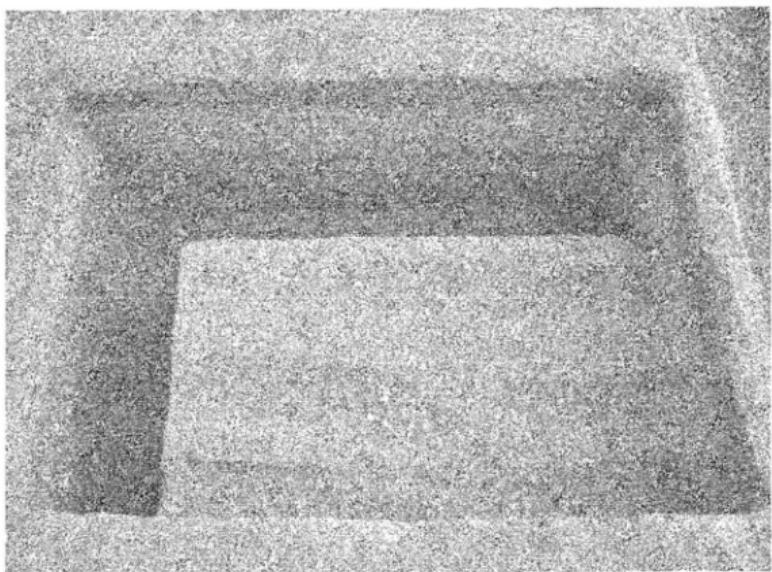
(2) 1トレンチ全景（西から）

長岡京跡右京第 1014 次調査

図版五



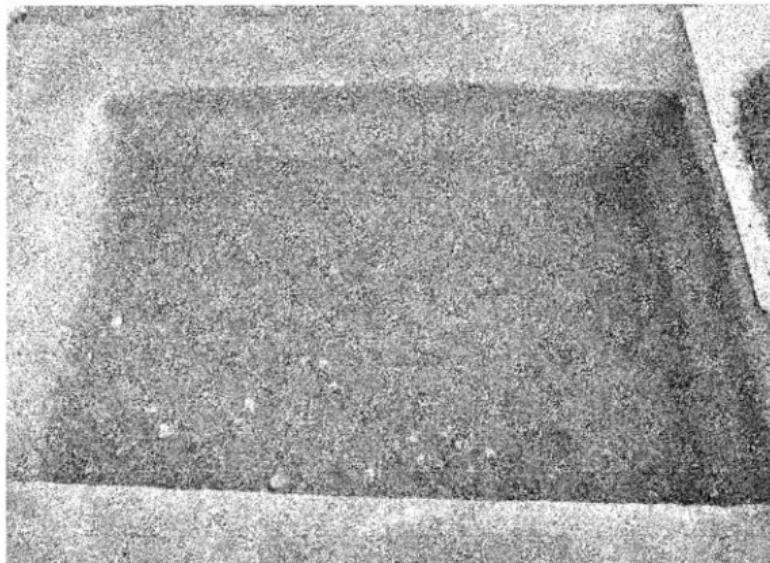
(1) 2トレンチ上層（西から）



(2) 2トレンチ全景（西から）

長岡京跡右京第 1014 次調査

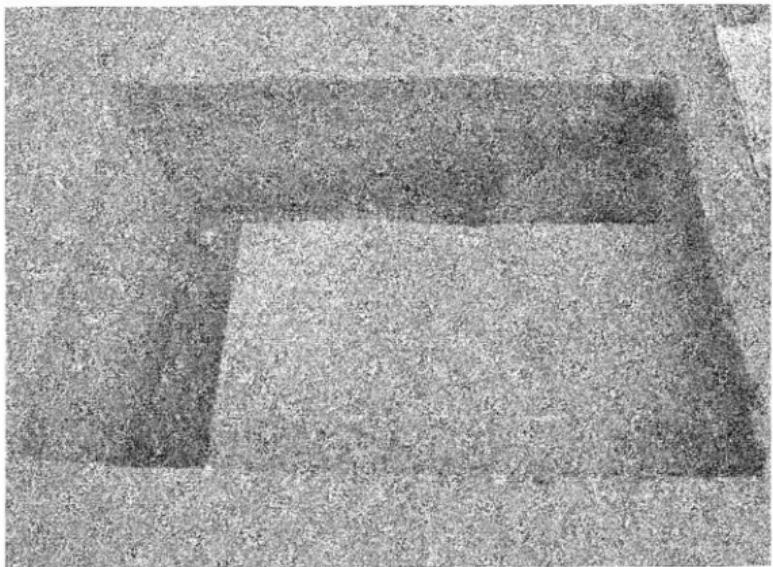
図版六



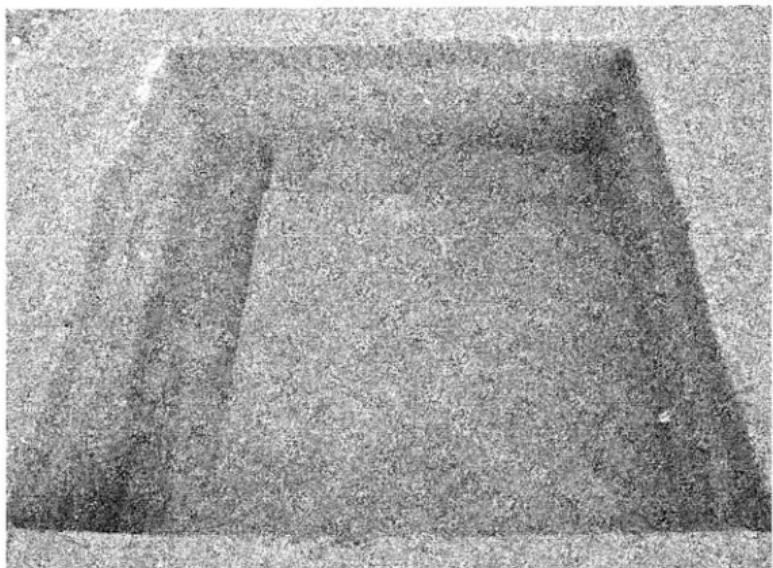
(1) 3トレンチ上層（西から）



(2) 3トレンチ全景（西から）



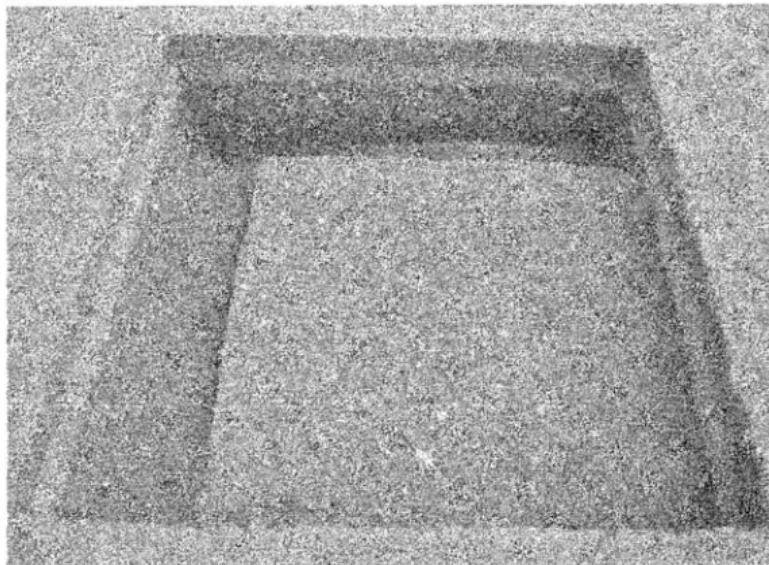
(1) 4 トレンチ全景 (西から)



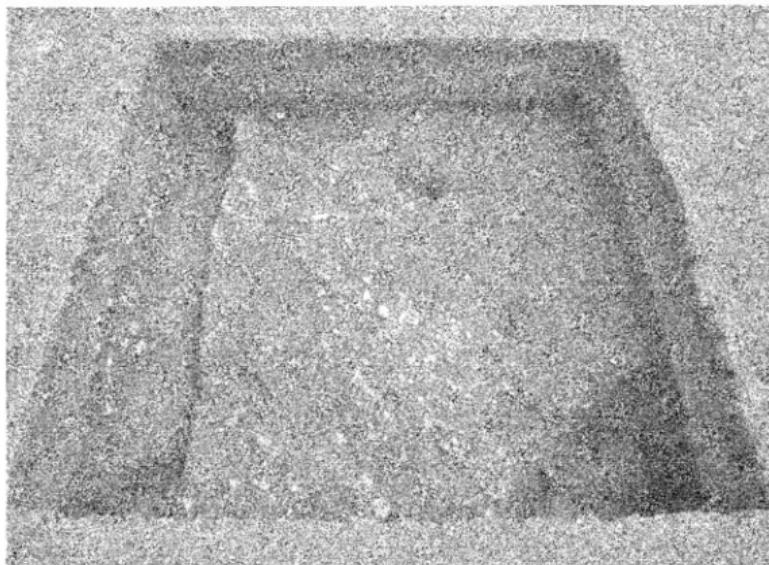
(2) 5 トレンチ全景 (西から)

長岡京跡右京第 1014 次調査

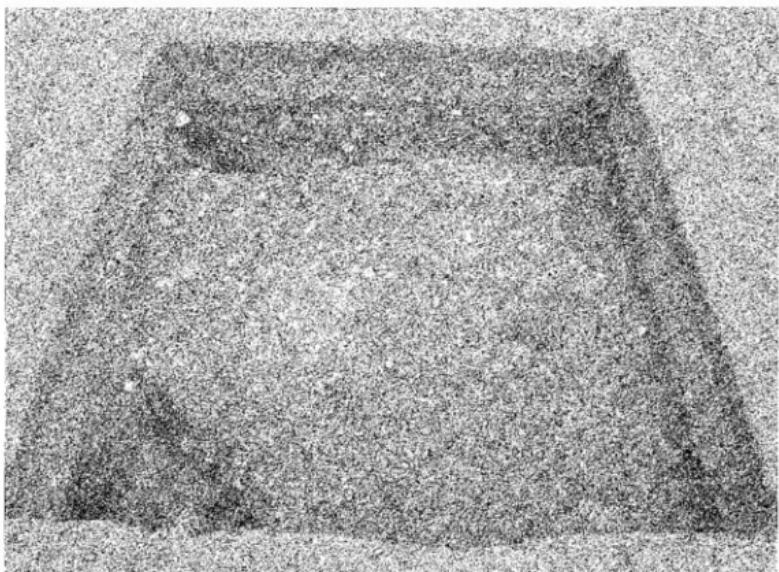
図版八



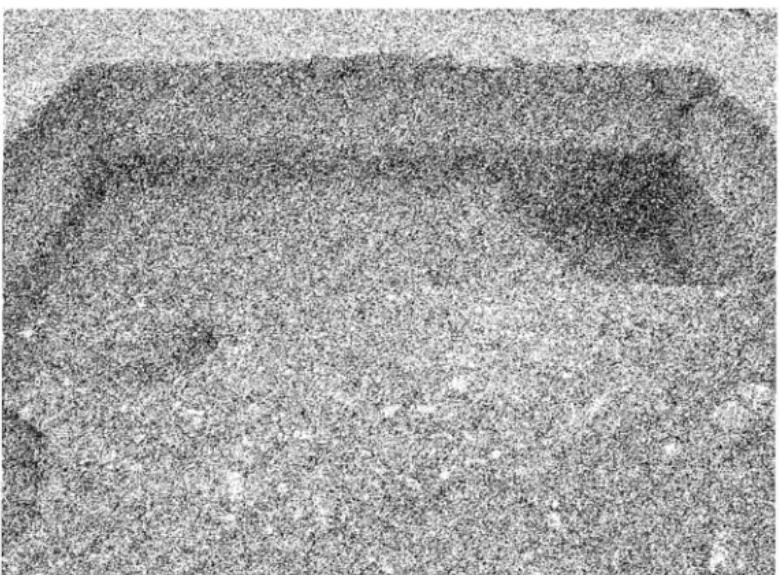
(1) 6 トレンチ全景 (西から)



(2) 7 トレンチ全景 (西から)



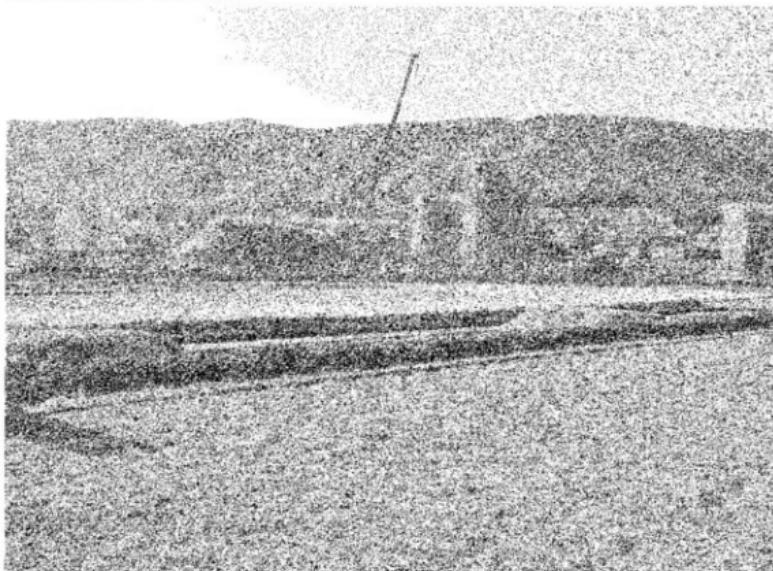
(1) 7トレンチ全景（南から）



(2) 7トレンチ落ち込み SX05（北から）

長岡京跡右京第 1016 次調査

図版
一〇



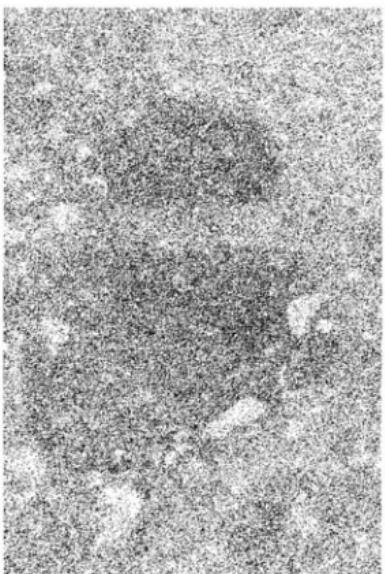
(1) 調査地周辺の様子（北東から）



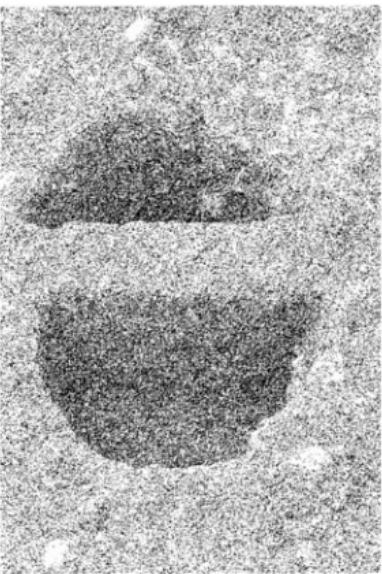
(2) 調査地全景（東から）



(1) 1トレンチ全景（東から）



(2) 土坑 SK01（西から）



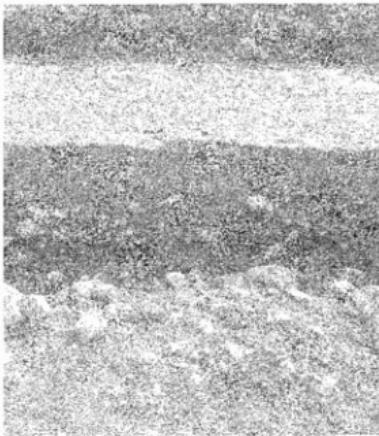
(3) 土坑 SK02（西から）

長岡京跡右京第 1016 次調査

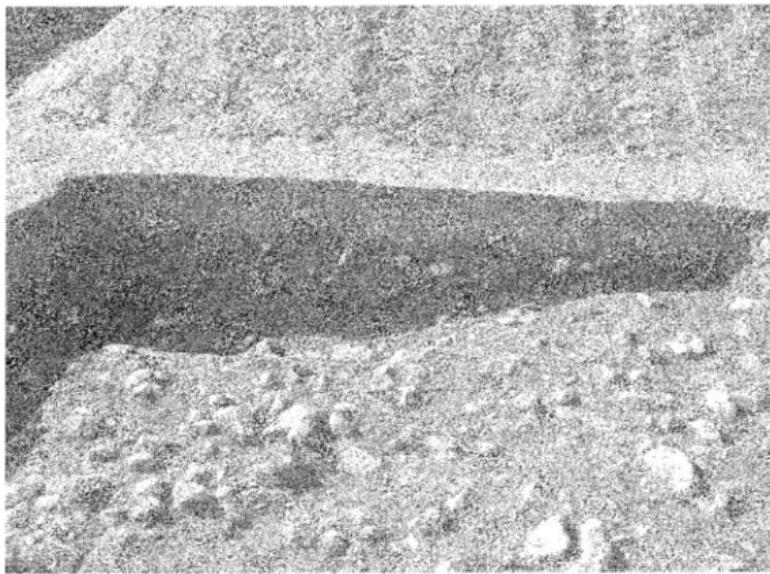
図版
一一



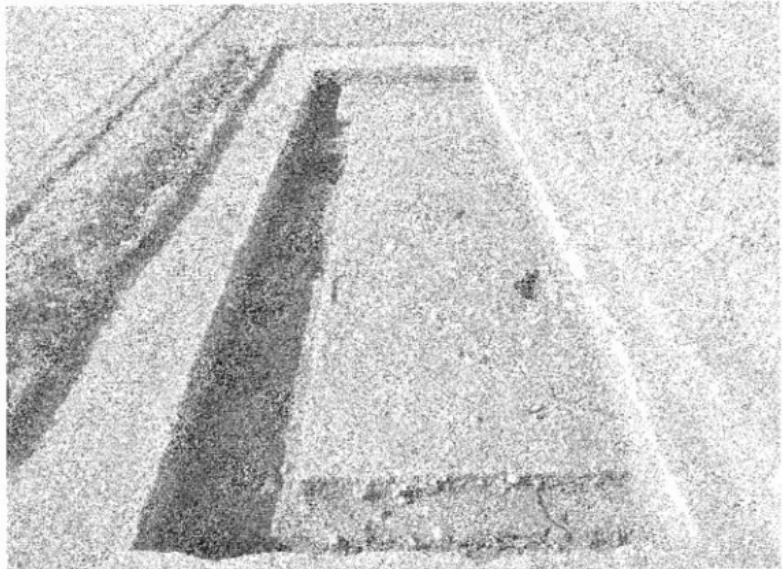
(1) 土坑 SK03 (西から)



(2) 1 テンチ南壁の土層 (北から)



(3) 1 テンチ西壁の土層 落ち込み SX04 (東から)



(1) 2トレンチ全景（東から）



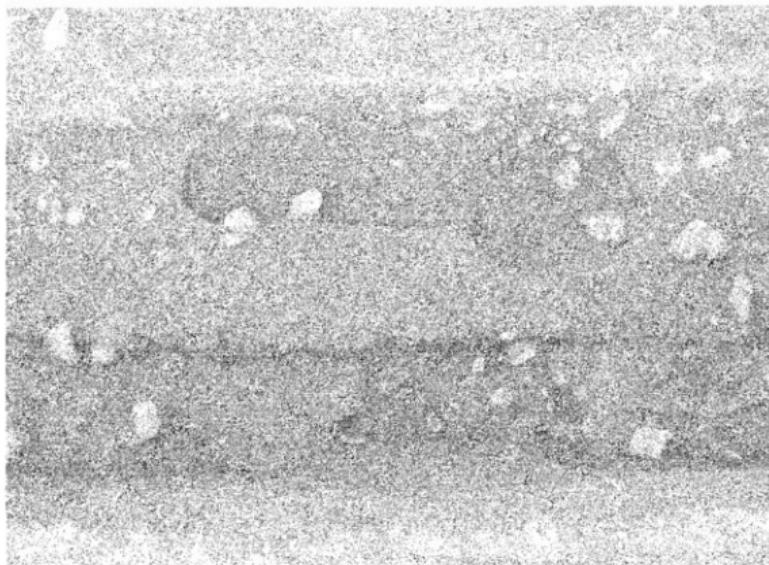
(2) 2トレンチ南壁の土層（北から）

長岡京跡右京第 1016 次調査

図版
一
四



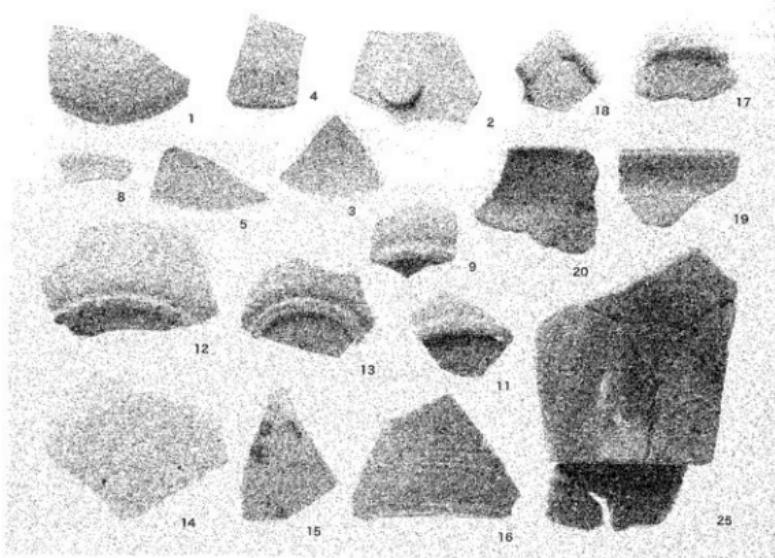
(1) 2トレンチ下層遺構1 (南から)



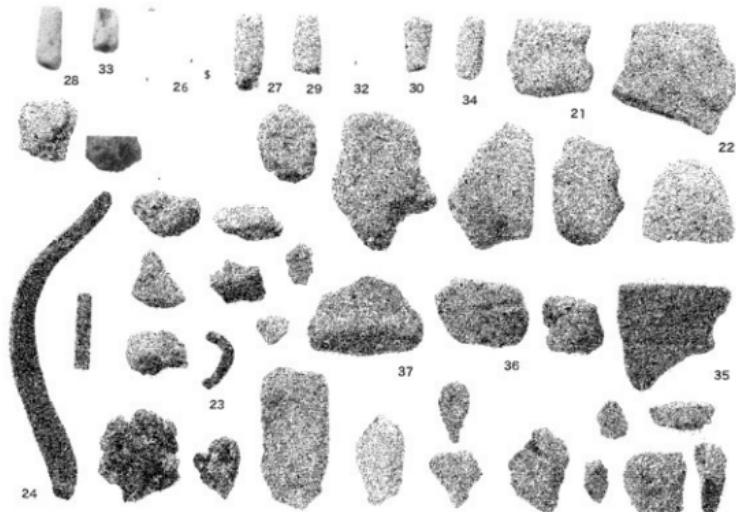
(2) 2トレンチ下層遺構2 (南から)

長岡京跡右京第 1016 次調査

図版一五



(1) 出土遺物-1



(2) 出土遺物-2

長岡京市文化財調査報告書 第 59 冊

平成 23 (2011) 年 3 月 28 日 発行

編 集 財團法人 長岡京市埋蔵文化財センター

〒 617-0853 京都府長岡京市奥海印寺東条 10 番地の 1

電話 075-955-3622 FAX 075-951-0427

発 行 長岡京市教育委員会

〒 617-8501 京都府長岡京市開田一丁目 1 番 1 号

電話 075-954-3557 FAX 075-954-8500

印 刷 株式会社 ダイ

〒 604-8241 京都市中京区三条通新町西入ル釜塙町 22

ストークビル三条烏丸 4F

電話 075-254-0646 FAX 075-254-0647